

大学院共通科目「日本語（論文作成）」

長谷川 哲子（関西学院大学経済学部／関西学院大学院言語コミュニケーション文化研究科）

2011年4月に日本語教育センターが新設されました。それに伴い、新たに開講された日本語科目の一つである「日本語（論文作成）」について、2011年度の概要をご報告します。

この科目は、科目名が示すとおり、論文やレポートなど、アカデミックな場面で必要とされる文章作成に取り組むクラスです。春学期は8名、秋学期は5名の大学院生が受講しました。

春学期は主に、論文作成を扱った市販教材を用いながら、アカデミックな文章の文体、文章構成などを学びました。受講生はいずれも大学院生のため、学部生のときの授業でこうした内容は一通り学習したことがあるはずですが、もう一度復習することで新たに気付いた点がそれぞれにあったようです。また練習問題によっては、教材が正答としているもの以外にも、こういう答えはどうか、こんなふうを書いてみたらもっといいのでは、というように様々な疑問やアイデアが受講生から出されることがあり、単に正答に満足することなく、それを越えた内容を考えることができました。

秋学期は、春学期の続きの部分を進めながら、授業後半では、毎回テーマを決めて800～1000字程度の意見文を書いてくるという課題を課しました。授業内では、各自が作成してきた文章を互いに交換して読み合い、分かりにくいと思われるところ、分かりやすいと思った文章などについて、ただ感想を述べるだけでなく、なぜ分かりにくいのか、また、なぜ分かりやすいのかといった点をディスカッションしました。受講生の所属は、言語コミュニケーション文化学科、商学科でしたが、それぞれの専門分野が異なることもあり、さまざまな視点からの意見交換ができました。当初、自分の文章をクラスの他のメンバーに読まれることに抵抗があるかもしれないと少し心配していました。しかし、どのような書き方をすると分かってもらえないのか、また、どのような書き方をすれば分かりやすくなるのか、読み手の評価を意識しながら書くという視点を持ちながら書くことの重要性をそれぞれが認識できたようです。これまで書き手の側からのみライティングという作業をとらえていた受講生にとっては、読み手を意識したライティングがいかに必要であるかを、複数の書き手による具体的な例を通じて知ることができたという成果があり、この活動は、概して受講生に好評でした。大学院生として、学術論文のように常に他の読み手の評価を受ける文章を書くことに携わっていく受講生に対して、こうした意識変化をもたらすことが少しでもできるような活動を今後も続けていきたいと考えています。

春学期、秋学期ともに少人数クラスであったため、全体として、各自がこれまで論文やレポートを書く際に疑問に思っていたけれどなんとなくやり過ごしてきたこと、見落としていたことにじっくりと向き合うことができたのではないかと考えています。

書くことは、単に文字を記すという物理的な作業ではなく、ましてやそれが母語でない場合、困難さや苦手意識を感じる受講生も多いと思われます。大学院生として研究活動の途上にある受講生のみなさんには、この授業を通じて自分の考えを深め、また新しい何かを発見する醍醐味を実感してもらえることを願っています。